

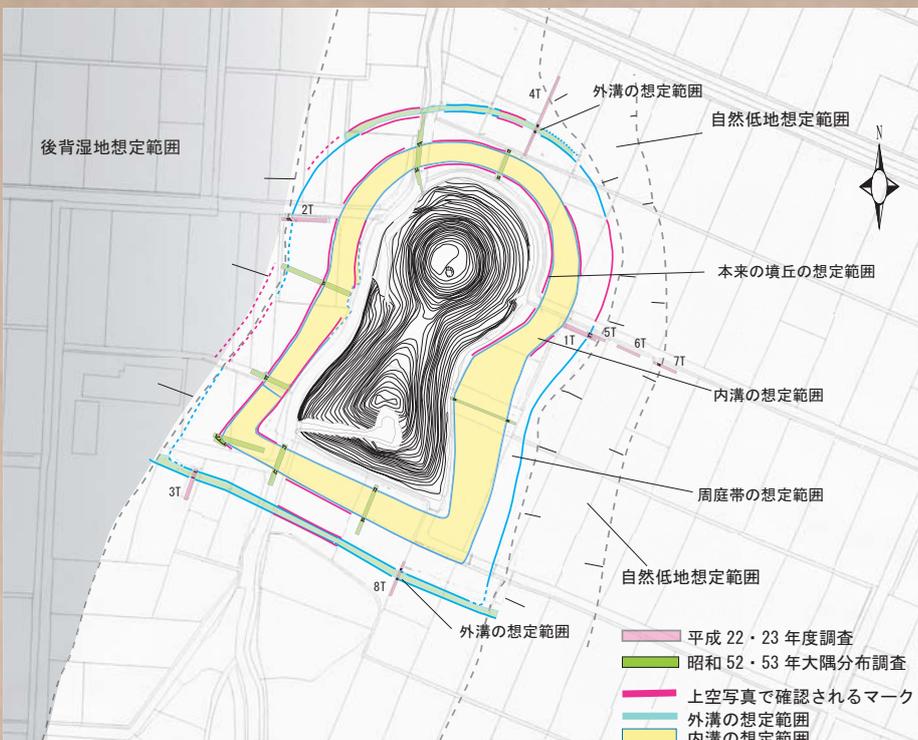
機械で、溝の範囲を広く調べる方法も採用しました。これによって、横瀬古墳の範囲を特定することができました。

### 調査の成果

確認調査の結果、横瀬古墳には内溝と外溝の二重周溝を備えた前方後円墳

であることが分りました。外溝の幅は約4m、深さは約1mでした。ただし、外溝がしっかりと造られているのは後円部北側と前方部南側だけでした。しかしそれでは、墳丘の東側と西側は内溝しかないのかという疑問が生じます。

二重周溝を備えている場合、内溝と



(図1) 過去の調査等をもとに作成した横瀬古墳の復元平面図

外溝との間に、土塁のようなものを築きます。これを『周庭帯』と言います。外溝はこの周庭帯とその外側をはっきり区画するために施されたと言われています。周庭帯は、現代に至るまでに耕作地として削られて土塁のような形は存在していません。しかし、後円部東

側に設定したトレンチでは、外溝らしき跡が見つかりませんでした。周庭帯を造るため、土手を削った痕跡が確認されました。

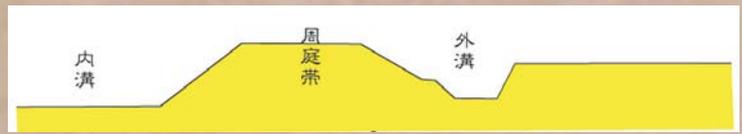
横瀬古墳はそもそも南西―東北に長く延びる小砂丘を利用して造られていると推定されています。横瀬古墳の立地する場所から西側はこの砂丘が緩やかに低く傾斜していて、そこから永吉台地の下まで黒色の泥炭層が形成されています。『後背湿地』と言います。

一方、古墳の東側と言いますと、西側ほどの広大な湿地はありませんが、今回の調査で小さな自然低地が南北に帯状にあったことが分りました。横瀬古墳から南東側に『池田』という砂丘地には似つかわしくない地名があつて、かつて池があつたという伝承があると地元の方から話をうかがったことがあります。そこから考えると、横瀬古墳東側の自然低地は、細長くて幅の狭い小さな湿地だったのかもしれない。

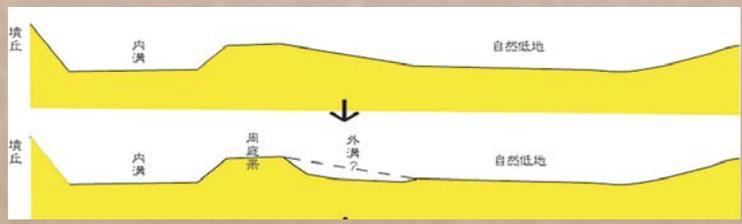
少し回りくどくなりましたが、つまり、砂丘が連なる墳丘北側と南側はしっかりと古墳の内側と外側をはっきりさせるために、はっきりとした外溝を造る必要があつたのでしようが、東

側と西側は、自然地形が緩やかに低く傾斜するところを利用していると考えられます。周庭帯をはっきりと区画するため、自然低地の低くなりかけたところを削って周庭帯の形に成形し、しかし外溝は掘らずに、自然低地を古墳との境界として考えられます。(図3)

これまでの調査の成果をもとに、筆者が横瀬古墳築造当初のイメージをイラストに描いてみると、このような感じになりました。(図4)



(図2) 墳丘南側における内溝・周庭帯・外溝の断面図



(図3) 墳丘東側における周庭帯の形成イメージ断面図